

暴かれた真実。業界黙示録

「暴かれた真実・業界黙示録」は、実際に起こったパチンコ・スロット業界の事件・詐欺・摘発などをもとに構成された実録風ドキュメント連載である。登場人物や店名は仮名化されているが、事件の内容は極力事実に基づき構成されている。閉ざされたホールの奥で何が起こっていたのか――いま、その真実が暴かれる。

File.06 実録・信頼を食い潰した影――岐阜・某ホール従業員横領事件の記録

※本連載は、実際に起こったパチンコ・スロット業界の事件・摘発・不正事案を素材にした実録風ドキュメントです。登場人物・店名は仮名化し、経緯は事実を基礎としつつ、読面の読み物としての性質上、一部に脚色・再構成・推測描写を含みます。現在の業務慣行や法令とは異なる当時の状況が登場することがありますが、不正を助長する意図は一切ありません。

岐阜市郊外に「パーラー陽乃」という中規模のホールがあった。チェーンの中では目立つ店ではない。だが、休日には駐車場がほぼ埋まり、常連たちが似た時間によつて来て、似た席に座る――そんな生活のリズムのような場所だった。開店すれば光と音が洪水のように溢れ、閉店すれば、一気に静けさが戻る。誰もいない島にだけ、液晶の余熱が残る。翌日の釣銭準備、レシート束、集計と銀行入金を目安、細かな補修のメモ。店は派手に見えて、その裏にあるのは地味な反復作業の積み重ねだ。

杉浦直人（仮名・三十代後半）。入社以

のは「この差額は、翌日に必ず解消している」とメモがありますが、どの処理ですか。問いが重なるほど、答えは「事務の癖」では説明できなくなる。沈黙。視線。椅子の軋む音。彼は右手で紙コップを押しつぶし、左手で顔を覆った。肩が、ひとつ、落ちた。

「……僕です。少しずつ、やっていました」。最初は生活費の足しに、次は借金返済に、最後は勝って返せると信じた。彼は、そう言った。罪状の詳細は警察で語られることになる。会議室のしぼしの沈黙のち、店長は深くため息をついた。長い間、信頼してきた部下が、自分の目の前で崩れていく。叱責の言葉を見つけれないまま、「家族には……」とだけ聞くと、杉浦は小さく首を振った。「まだ……」。

通報は淡々と行われた。業務上横領の疑い。被害額は累計で数千万円。取り調べで彼は、手口の一部を説明した。日計の締め時刻を一部ずらし、翌日の入金に紛れ込ませる。レシート束を仕分ける際、一部の束を「未計上」として別に置き、翌日まとめて計上する。帳票の控えは自身でフオーマットを維持し、差額は「翌日補填」のメモで隠す。いずれも、当時の運用の甘さがあったからこそ成立した幼稚なやり口だった。複数人での突合や、オンラインでの自動照合、権限の分離が徹底されていれば、長期化は難しかっただろう。

報道が出たのは、逮捕から数日後だ。

来、経理補助から店の会計・在庫・日計表の取りまとめへと任せられるようになり、五年目には小口の管理と売上の一部回収を担当する立場になった。口数は少ないが手が早い。数字の丸め方を知っている。現場からは「杉浦さんに渡しておけば間違いない」という空気が自然とできていった。彼の机の上には、日々の売上台帳とレシート、金種表、クリアファイルが整然と並ぶ。すべてが「正確」に見える。

最初のズレは、おそらく本人にも「誤差」だった。子どもが生まれ、家計はふくらみ、目の前には自分が好きな遊技機の新台が入った。財布の中にある一万円札は、少しだけ薄い。彼は封の一つを開けて、三万円を抜いた。すぐ戻すつもりだったという。翌週の残業手当と、フロアの細かな雑費の帳尻を合わせれば、誰にも気づかれない。レシートの集計を一項目だけ遅らせ、翌日に回す。日跨ぎにした数字は、監査シート上では「計上のタイミング差」として片づく。こでやめていれば、ただの愚かさで終わっていた。

地元紙の片隅に「パチンコ店従業員、売上金横領容疑」と見出しが載る。近隣の人たちは口をそろえて「あの人は真面目だった」と言った。真面目さは「外形」であり、外形は時に最良の仮面になる。ホールのスタッフルームでは、不安と怒りと徒労が渦を巻いた。夜の休憩室で、若いスタッフが涙ぐみながら言った。「僕ら、信用されてると思ってました」。店長はやり切れなかった。彼は誰より早く店に入り、誰より遅く出た。だが、その背中を見ていたはずの部下の変調に、最後まで気づけなかった。

事件の余波は、店の外にも広がった。地域の掲示板には、匿名の書き込みが並んだ。「あの店、大丈夫か」「遊技した金を盗まれるのは気分が悪い」。横領と遊技結果は関係がない。だが、信頼は論理では修復できない。数字の整合は後からいくらでも説明できるが、感情は一度崩れると戻らない。翌月、客足は目に見えて鈍った。閑散とした午後、島の向こうで常連の老人が静かに玉を流す、その背中がやけに遠く見えた。

本部は急遽、運用を見直した。現金管理は二人以上の立ち会いを原則化、突合は日次で別担当者が実施、帳票の様式は本部サーバーからの配布のみとし、編集履歴を残す。封緘は記名式の使い捨てシールに変更、金庫の解錠は二重化し、鍵は物理と権限カードの分散管理に。外部の監査法人による抜き打ちの実査も導入された。さらに、長期同一担当を避けるジョブローテーション、連続休暇時

たのかもしれない。

しかし「戻す」日は来なかった。小さな穴空きは、まるで紙コップのピンホールのように、最初は誰にも見えない。だが、水が減れば、また注ぐ。繰り返すほどに、手の動きは迷いを失う。金額は五万円になり、十万円になり、月に数十万円へと膨らんだ。彼のメモはさらに几帳面になった。数字の端数をそろえる。計上順を固定する。帳票のフオーマットを「整備」する。整っているほど、疑念は遠ざかる。信頼は、細工の最良の材料だった。

ある夏、同僚がぼつりと言った。「杉浦さん、最近ちょっと疲れてませんか？」。深夜の「清算締め」が増え、帰り際にひとり事務所に残る時間が長くなった。理由は、終わらない「調整」のためだ。彼は自分を追い詰め始めていた。家庭では、妻が家計簿の赤字を責めた。子どもが夜泣きし、眠る時間が削れ、休日は気配を消すようにホールの空き台に座った。勝てば埋められる。負ければ次で取り返す。穴は縮みも膨らみもせず、ただ「そこに」

の代理点検、匿名の内部通報窓口。いずれも、いまでは当たり前の水準だが、当時の陽乃には不足していたものだった。

杉浦の家庭は、静かに壊れた。妻は子どもを連れて実家へ戻り、双方の両親が何度も話し合いを持ったが、元に戻ることはなかった。彼は取り調べの中で、家族に向ける言葉を何度も探したという。だが、言葉は見つからない。数字を操る手は多弁だが、謝罪の言葉は不器用だった。彼が本当に欲しかったのは金だったのか、それとも「できる人間」と見られる承認だったのか。刑事事件の記録は、そこまで教えてはくれない。

私は店が静かになった夜、跡地を訪ねた。のちに屋号は変わり、什器も塗装も入れ替わっている。それでも、バックヤードにつながる細い通路の角度や、事務所の窓の位置、どこかで見た動線が残っていた。あの時、封筒を机に置き、彼はどんな呼吸をしていたのか。異常はいつも日常の中に紛れる。事件は、突然やつて来るのではない。積み重ねの末に、ある日、やつと表に出る。

この一件は、業界に何を残したのか。第一に、信頼はコントロールの代替物ではないこと。人を信じることと、仕組みでリスクを減らすことは、両立させなければならぬ。第二に、「真面目さ」は内部統制の証拠にならないこと。几帳面さは美德だが、同時に疑念を眠らせる。第三に、日々の小さな差異を放置しないこと。誤差という言葉は便利だ。便利な言

あり続けた。

決定的なきっかけは、チェーン本部による定期監査の強化だった。新任の監査担当が来店し、日計の抜き取り検算と金庫内現金の突合作業を実施。現金の差額は、最初は数千円の範囲だった。だが、過去数か月分のデータに遡ると、月末に近づくほど差が膨らむ傾向が見つかった。監査担当は台帳の書式に違和感を覚えた。「見た目がきれいすぎる」。数字の並び、フオンント、書式の更新日――細部が揃いすぎていた。人の手で毎日更新しているはずの書類とは思えない「均一さ」。経験則は告げる。これは、書き換える人間が「同一人物で固定」されている現場の匂いだ。

二回目の監査で、杉浦は呼ばれた。会議室。灰色のテーブル。紙コップのコーヒー。部屋の空調は冷たいが、背中には汗が滲む。監査担当は、責める口調を避け、事実確認だけを淡々と重ねた。「この日の端数、なぜ切り上げていますか」「この伝票の計上時刻、実際の閉店より遅い

葉ほど、危うい。

事件から十数年が過ぎ、当時のスタッフの多くは別の場所に散った。新しい職場、別業種、家庭の事情。陽乃という名前を知る人も少なくなった。だが、業界の会計・監査の現場では、今も時折、この事件に触れる声を聞く。あの件があったから、うちは二重化を進めた」「あの頃は、ほんとに危うかった」。失われたものは戻らない。だが、失われた理由を言葉にし続けることでしか、次の現場を守る術はないのだと思う。

最後に記しておく。本稿で描いた人物の内面や家庭事情には、一部に推測と脚色が含まれる。だが、「信頼を食い潰す」とはどういうことか、という輪郭は事実が教えてくれた。数字の整った台帳の端、わずかな擦れや、紙の薄い汚れ。その小さな兆しは、後知恵で見れば確かに在った。気づけなかったのは、誰か一人のせいではない。信頼は誰にとっても甘美で、そして、脆い。

――あの影は、もうここにはない。だが、記録の中には残しておく。再び同じ影を生まないために。

脚注・本稿は実在の事件を基礎とし、当時の報道・関係者への取材情報に基づき再構成しています。登場人物・店名は仮名。現在のホール運用・会計実務とは異なる点がありますが、現在には多くの店舗で二重立会・権限分離・オンライン照合等の統制が整備されています。